

## 教職員自己紹介

稲永 健太郎(いねなが けんたろう)

社会情報システム学科・講師

企業や行政機関をはじめとする組織から一般の人々にいたるまで、現在の情報化社会において情報は大変重要なものであり、かつ必要不可欠なものとなっています。そして、今後も情報の重要性はますます高まっていくことでしょう。

組織においては、これまでに活動の基盤整備や効率化、付加価値創造といったさまざまな目的で、情報化が組織の規模に関係なく着々と進められており、組織における情報の取り扱いが、その組織の活動やその存亡にも大きな影響を与えています。

私は、組織における情報の取り扱い、中でも組織による情報発信に着目し、社会科学(経営情報学)と自然科学(情報工学)の両方の視点から、組織のあるべき姿を追求すべく研究を進めています。

経営学の視点からは、組織が発信する情報について、その組織自身に対してあるいは外部の他の組織や社会に及ぼす影響について、各種調査のデータの分析を行い、組織が情報発信に関してどのような対策を取るべきなのか、人材・モノ・組織の面から、組織の情報システムに対する要求を提言していきます。

また、情報工学の視点からは、組織が有効に情報発信するためにはどのような仕様の情報システムが必要なのか、そしてどのようにしてその情報システムを構築していくのか、ソフトウェア開発の面から情報システムの設計・改善方法を提案しています。

上記の研究とともに、東アジア諸国における国家レベルでの IT 戦略に関する研究も行っています。

シンガポールやマレーシアをはじめとする東アジア諸国は、国家レベルの事業として IT 戦略を打ち出し、着実に IT 化を進めています。一方、日本は e-Japan 戦略を打ち出したものの、前述の国々に比べ、国家レベルの政策として立ち遅れた感があります。

この研究では、IT 化の進捗状況をはじめ、経済や文化などの国家の基本的要素について、日本とその他の東アジア諸国との比較を行い、今後日本をはじめとする東アジア諸国が取るべき IT 戦略について考えていきます。



坂本 直人(さかもと なおと)

知能情報学科・教授

平成 14 年 4 月に情報科学部に着任しました。それまでは、茨城県つくば市にある筑波大学電子・情報工学系に図らずも 24 年間も勤め、平成 14 年 3 月に定年となりました。つくば市に住むまでは、生まれてからほとんど 2, 3 年置きに住所を変えていましたので、筑波大学からもせいぜい 5 年位で移るものと考えていました。そこで、図らずも 24 年間という次第です。



高校卒業までは主に九州内を動き、それから東京に出て、つくば市に到るまで方々で生活してきました。大学工学部と大学院修士課程では応用数学を専攻し、3 年程働いた後、南カリフォルニア大学(ロサンゼルス)の大学院博士課程に進学し、微生物学を専攻しました。学位(Ph. D. in Microbiology)修得後ミシガン大学医学部で博士研究員として 2 年間働きました。帰国後、九州大学、理化学研究所、筑波大学と勤め先を変え、また縁があって九州に戻ってきました。

研究分野は数理生物学と計算生物学であり、生命現象(生体反応系の機能など)の(決定論的)数理モデルを構成し、そのコンピュータシミュレーションにより現象の特性解析を行っています。とくに、細胞内で作動する代謝経路の動特性と制御特性に関心をもっています。情報科学部の卒業研究ではこれらの特性解析を実行するソフトウェアの開発を目指してほしいと考えています。研究の手段は現在はコンピュータですが、米国時代には、酵素(蛋白質)を大腸菌から単離し、蛋白質分子の物理化学的特性を解析する実験を行いました。

これまで情報学の教育に携わってきましたので、高度情報社会に有為な人材の輩出に情報科学部が成功するように努めたいと思います。情報科学部は、強い倫理観と高度な知識・技術をもち、社会と人間が必要とする情報環境を創造する技術者の育成を目指しますが、そのためには数学、英語、国語の基礎学力の修得が必須と考え、その教育に力を注ぎます。